

支部活動のあゆみと現状

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-09-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 豊, 八木, 祥文, 老川, 寿太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025750

支部活動のあゆみと現状

1. 県東部に在って想うこと

県東部では、富士、愛鷹、箱根、伊豆の火山を中心に、多様な地学的素材がみられる。多くの先人の努力と熱意によって、この 10 年間に多くの地質巡検会が持たれ、内容の紹介がなされてきた。最近では東海自然歩道に沿った地域の地質調査に伴い、富士川谷の南部フォッサマグナ地域の第三系の堆積構造が注目され、みごとに発達した砂泥互層や貫入岩類に小川賢之輔氏の研究の成果が披瀝された。巡検会毎に会員の関心も、点としての露頭の観察を経て、谷筋に沿った線としての連続露頭のルートマップ作りに、更に想いは広域にわたる堆積構造の推察へと、視点が点から面へと広がるがりをみせている。露頭の観察の際にも、県東部では貴重な砂泥互層を相手に、粒径変化をみ、地層の上下を決め、岩片をとって顔にこすりつけるようにして岩質を鑑定し、……この砂岩は……どことこの……累層に属するものと類似していると、少しは議論をはさみつつ、限られた時間内に、この砂泥互層をなんとか明日の教材にと角度を変えつつ写真を撮ることに懸命になる姿もみられる。巡検会には 1 人 1 人に data の集積をし、会を重ねる中で、なんらかの結論を引き出し、まとめてゆきたいと考えている。

地学は地域性に富んだ科学であるといわれる。即ち、その地域の地学的現象は、その素材に朝夕ふれる機会の多い、その地域の住人が、素材を最もよく承知しているともいえる。我々はまさに、その素材をみなれ、承知しているはずの住人なのだが、地域の地学的素材を教育の現場に生かし得るまでに、またより科学的なものまで引き上げようとしているかどうか、具体的な動きはまさにこれからというところだろうと想う。一通り観たあとには、1 人 1 人のまとめがあつてよいはずである。そして、どのような観かたをし、何を観、考えたか、また考えようとしているかを、会員一人一人が自分に問うところに地学会 10 周年の意味を持たせたいように想う。“東海自然歩道沿いの地学案内”の記念出版は、まさに承知しているはずの素材を生かした、手づくりのものとしたい。本栖湖—根原—麓—田貫湖・天子ヶ岳へ・富士川谷—徳間付近の調査が、東部では急がされている。

東部地域の下記 4 地域には、それぞれ特色ある地学素材がみられる。

富士・富士宮地域＝富士火山・富士川谷の第三系の堆積構造・第三系を貫く火成活動・温泉と深火成活動、第三系にみられる断層系・砂泥互層の堆積のしくみ・有孔虫、珪藻など微化石と生層序・たまねぎ状構造などの堆積岩の風化の問題、河岸段丘など。

沼津、三島地域＝吉原～沼津間の海岸漂砂とその変遷、浮島低地や狩野川流域の沖積海岸平野の生成と海水準変化の問題、愛鷹、箱根火山山麓のローム層と火山灰起源の土壌の生成の問題、起伏量、谷密度、傾斜区分など火山山麓の地形、地下水、溶岩にみられる熱残留磁気の問題など。

御殿場・小山地域＝富士火山起源の莫大な火山灰とロームの層序区分・足柄層群にみられる貝化石、丹沢変成帯にみられる造岩鉱物の移り変わりや、深成岩類など。

伊豆地域＝狩野川流域の河岸段丘・天城火山と寄生火山群、およびその流出物、南端～西伊豆海岸にみられる海岸段丘やノッチの分布など。

東部地域には身近な素材を無造作にあげただけでも、かなり面白いテーマがありそうである。地学

会の東部での活動も、各地域の素材を最もよく承知している人々が、自分の data を持ち寄って、何か一つオリジナルなものを生み出していくのが望ましいように想えてならない。以上の4ブロックごとにでも……。 (高橋豊 記)

2. 中部支部活動の現状と課題

中部支部としては、支部発足以来下記の見学会、講演会、講習会、巡検会等を催してきた。その内容は天文、気象、地質と変化に富み、中部としての良い条件をでき得る限り取入れてきたように思える。ここ数年は、東海自然遊歩道の地学案内のための活動が中心となり、山梨県境の田代峠から大井川までの区域を分担し、現在その研究がまとまりつつある。この区域は東から富士川の第三系、古第三系の瀬戸川帯、中生代白亜系の四万十帯と東から西へ古い地層が現われる褶曲、断層運動の激しい地域であり、それ故に難しい点が多く各会員の精力的な調査研究が期待されるものである。

これまでの支部活動の実情をみると反省し改善すべき点が多々あり、そのうえにたってこれからの活動の方向付けをする必要と時期にきているように思える。地学会の活動が現場の地学教育と直結する要素、地学の一般への振興普及という要素、学問としての地学研究という要素を持っているとするなら、それらを十分に踏まえ、支部活動がより計画的、組織的に運営されていくよう尽力することが、我々の今後の課題であろう。

中部支部活動報告

- | | |
|--------------|----------------------------------|
| 昭43年 11月 30日 | 「天体望遠鏡の使用法と観察」新川稔会員指導 橋高校にて |
| 昭45年 11月 7日 | 「由比寺尾山地すべり地見学」岩橋徹会員案内 |
| 2月 13日 | 「静岡地方気象台の見学」静岡地方気象台にて |
| 昭46年 11月 23日 | 「天子岳西側佐野川流域巡検会」－東海自然遊歩道－加藤智雄会員案内 |
| 2月 11日 | 「竜爪－西里線地質巡検」－東海自然遊歩道－岩橋徹会員案内 |
| 昭47年 2月 11日 | 「蘆科川上流の地質」－東海自然遊歩道－徳山明会員案内 |
| 昭48年 7月 14日 | 「ソビエト古生物展講演会、見学会」東海大学海洋学部にて |

(八木祥文 記)

3. 西部支部10年の歩み

西部は静岡大学農学部の加藤芳郎先生の熱意によって地学に関する探究の気運があふれた。有志等は岩石の肉眼鑑定、顕微鏡鑑定、地質図作成、日本の地質の把握などの目的の下に、加藤先生の知識を全部吸収しようとの意気を持って、手と足と目の実地研究を始めたのは、地学会発足10年も前からであった。学習は全休日が使われ、夜になること、豪雨になること、強行は常であった。正月の休日はまず山

上で送るのが常識であった。

1964年5月30日県地学会結成準備会が開かれ、1964年6月28日結成大会が開催され、これまでの有志は地学会に全員参加した。静岡県地学会に発展してからは、その総会、年会、例会及びそれと同時運営された種々の会行事に参加すると同時に、支部特別行事にも多数会員が参加しつつ現在に到っている。その間の主要西部関係行事と特別行事を要約してみると次の通りである。

1965年 鳳来寺 河川礫採集参加

1966年 鳳来寺 岩石薄片作成講習会

1967年 袋井、山梨、宇刈、豊岡、峯の沢鉱山等へ日曜巡検会始まる。

6月、三方原貝化石採集、7月、天竜川地質鉱物、8月、三ヶ日フズリナ

1968年 浜名湖の研究

1969年 佐久間ダム巡検会(その他)(以下略)

以後、毎年巡検会、その他の行事をなし現在に及んでいる。

静岡大学鮫島輝彦先生、土隆一先生、伊藤通玄先生には、加藤先生とともに御指導を仰ぐ機会が多く心から感謝しています。各先生方の知識を喰べようというのが我々のねらいであった。百瀬光二会員、神間貞吉会員、大森徳志雄会員、新村光会員、野島宏二会員、鈴木昂先生、神谷正光先生、鈴木康介会員、杉浦正先生、安形昭夫会員、大石哲彌会員、村松和喜会員、桜井貞彦会員、原田年康会員、鈴木敬三会員、勝田益司会員、松井孝友会員、未久道二会員、市川半三郎先生らは西部支部のために御苦勞を頂いた方々であり、10年を過ぎて1年1年の足跡は価値の高いものが多い。次に10年間の特別行事を列記しておく。

1. 鳳来寺火山の岩石と地質

2. 中央構造線の研究

3. 天竜川沿岸の地質岩石、礫の研究

4. 万瀬地溝帯の地質

5. 二俣地溝帯の地質と岩石

6. 山梨宇刈森町間の地質

7. 小笠山の地質

8. 気田川沿岸の地質岩石

9. 浜名湖岸の地質化石

10. 佐鳴湖岸の地質化石

11. 浜松地方の地質

12. 熊、阿多古の地質岩石

13. 渋川儀光奥山の地質岩石

14. 青崩峠附近の研究

15. 山住山の岩石

16. 秋葉山の地質岩石

17. 竜頭山の地質岩石

18. 佐久間、浦川、吉沢の岩石地質

19. 水窪、梅ヶ島、渡元、二瀬の岩石地質

20. 翁川沿岸の岩石地質

最後に本部地学会、研究発表会には桜井昌先生、山下徹也先生、福田和夫先生を始め毎年参加をし、各々個人の発表をされた。県地学会と直接関係あるものに学校の岩石園作りがあり、ほとんどの小・中学校の地学関係指導に重要な役割を果している。

(老川寿太郎 記)